

韓国訪問雑感

柿崎 繁

98年9月、同僚研究者と一緒に、経済危機下における自動車産業の調査のため韓国を訪れた。ここでは、過去2度ばかりの訪韓の経験と比べて、今回、特に印象に残った点を、98年9月の経済危機下の韓国の雰囲気として伝えることができれば幸いである。

初めての訪韓

私が初めて韓国を訪れたのは93年10月で、ある研究会による浦項製鉄所・三星電子の工場調査に便乗してのことである。初めてビザ無しで韓国に出国した年で、関釜フェリーで入国した。土産を両手一杯に帰国する婦人達のお喋り、ヒッチハイクの日本人学生等、自由に往来する状況は実に新鮮であった。

古墳群が散在して奈良を想わせる慶州で仏国寺を見学し、夜は、労働者でゴッた返している庶民的な食堂で韓国料理を食べた。銭湯に入り、オンドルのある木質宿に泊った。

浦項では圧延工場をみたが、最新式のコンピュータ管理の工場からはほど遠かった。圧延工程が弱く、新日鉄等へ技術指導を仰いでいる状況であった。印象深かったのは、豪華なゲストハウス、幼稚園や学校をはじめ生活に必要な一切が揃っていて地位や階層によって入る社宅が判別できる高層社宅群、製鉄所建設前の漁村の写真、電動式で製鉄所の全容を模したミニチュア模型を前にして自信に満ちて説明する幹部職員の顔、そして朴大統領の自筆で「鉄は国家なり」と書かれた額縁である。鉄はこの国でも国策で創出されたのだ。

ソウルへの途中、テジョン市で万博をみた。雑なIBMの出展会場を観たが、それでも人々は「ハイテク」製品に目を輝かせていた。世界中に韓国を知らしめる運動に国中が参加している感じがであった。チョナン市の独立記念館にもたち寄った。人はまばらであったが、その広大さと記念館正面の像の偉容に圧

倒された。朝鮮民族に対する暴虐の限りを尽くした日本民族の血に染められた過去を認識し、二度と過ちをおこさぬ責任を問いかけられた。

初めてのソウルは、喧噪に溢れていた。ビル建設、道路工事と、そこら中で昼夜を舍かず突貫工事を行っていた。ソウルでは新村近くの木質宿を借りた。学生たちが朝早く大学図書館の席確保のために向かう姿が実に強烈な印象であった。大学では猛烈に勉強するという。日本の大学との違いを思い知らされた。

3日目に訪問した水原の三星電子工場では、最新の半導体工場をみることができず、本社の若手から家電工場についての説明を受けた。ショールーム等の宣伝文句は立派だが、垢抜けないデザインの製品という印象を拭うことはできなかった。反面、警備員も含めて工場はやたらと人が多く、部品等の頻繁な搬入で活気溢れる工場という印象であった。

訪韓最後の夜はソウル市内の人の渦に圧倒された。明洞大聖堂では光州事件の真相を求める人や反政府運動をする人のテントがあったが、寝泊まりする人はまばらで、周りに警官もいなかった。最後に、日帝の総督府や旧日銀ソウル支店＝韓国銀行などを見学した。景福宮を遮断し覆い隠す位置に建つ総督府の偉容に圧倒された。ともあれ、初めての韓国は、私にとっては何回かの海外旅行で最も印象深い旅行の1つとなった。

97年11月経済危機の始まり

2度目の訪韓はゼミ生を引率した97年11月の頃であった。その年のソウルは暖かった。前回とは異なり、人いきれと工事による喧噪の街という感じではなく、ファッションやデザインが洗練されて華やかになったが、少し人間がスマートになり、金を稼ごうとギラギラした目つき等が薄れている感じがした。総督府が壊され、サッカーファンの若者の交

国際・国内動向

流が増え、この間の経済成長による所得増大が影響したのであろうか。特に、当時大統領選が行われている最中なのにその雰囲気がなく、大勢の人々がいても南大門市場に金大統領候補（当時）が来ていたなど思いもよらなかった程である。そのうち街中で、たすき掛けのいでたちで婦人達は何やら道行く人々に呼びかけ始めたのに気がついた。貴金属供出と外貨持出しの海外旅行を手控えるよう訴えていた。大手旅行会社が海外旅行から手を引き会社をたたむニュースが流れたのは次の日だった。私達はアジア通貨危機が韓国に押し寄せた頃に訪問したのだ。しかし直ぐには理解できなかった。周りの華やいど雰囲気、前日、第一韓銀アナリストから、韓国経済に対する自信に満ちた解説を受けていたから。

帰国前夜、学生達とホテルでカラオケを楽しんだ。そこでビジネスマンが唄っていた歌が、当時問題となった竹島の韓国への帰属を叫ぶ歌であった。経済危機が始まる中で苛立ちとともに、底流に流れる反日感情が噴出してきたのであろうか。ともあれ、韓国の経済危機の始まりを目の当たりにして帰ってきた。

経済危機下の訪韓

～主として自動車産業の状況～

経済危機下の訪韓は昨年（2008年）の9月で、科研費による自動車産業の調査のためであった。

初日は、高麗大学教員から韓国自動車産業における生産管理の問題についてレビューを受けた。その中で大量解雇に反対する現代自動車のストライキ問題、大宇自動車の東欧展開の問題、また起亜自動車の倒産問題などについて貴重な説明をいただいた。また日本で何度か講演したことのある教員から日本経済再生に対する韓国の熱い期待を聞かされた。

次に市内見学をしたが、今回は婦人の運動を見なかった。目に付いたのは、「IMF体制を乗り切ろう」のスローガンと「IMF価格」というラベルであった。スローガンは、OECD加盟後直ちにIMF管理下に入る事態をもたらした政府への抗議を総動員の対応で乗り切るためであり、ラベルは安売りを表していた。

次の日、大宇自動車工場に行った。稼働率の低さと手持ちぶさたの労働者の姿が印象的であった。案内の説明では、大宇は現代と比べて系列からの調達

割合が少なく、性能さえ満たせば価格で調達先が決定されるという。現代の方は、多くの下請けを従え、経済危機下でそれが死重となっているという。特に、解雇を最小限に止めたストライキは、現代にとって労働者解雇や下請け契約破棄に対する抵抗圧力になるというのである。大宇の方がフレックスさにおいて現代を凌駕し、今年4月より始まる自動車輸入の大幅自由化後、現代を抜くという意気込みが印象的であった。

大宇を後にして、倒産した起亜自動車の本社ビルを訪問した。国会前に位置するそのビルは、倒産に抗議する労組の旗もなく静かで、倒産した韓国第2位の自動車会社の本社ビルとは思えなかった。起亜買収のための競争入札発表の時期で、提携先のフォードの入札不参加が話題となった。参入してまもない三星自動車だと起亜にとって有利であることなど詳しく説明してくれた。しかし、その内容よりも、私達に奇異な感じを与えたのは、これが倒産した会社の役員なのかと首を傾げたくなる程、何とも自信に満ち溢れた態度であった。何も悪くはない自分たちに責任をかぶせた政府のやり方を口々に批判するその有り様に、私達は起亜の労働者も大変な経営幹部を持ったものだと同情を禁じえなかった。

その日の夕食後、南大門市場からソウル駅まで散歩した。市場は、人々でごった返す時間なのに薄気味悪いほど静かで、足を踏み入れるのを躊躇うほど人気がなかった。ソウル駅の地下道では大勢のホームレスが目に入った。驚いたのは、新聞の上に幼子を真ん中にして両親が添い寝している姿の家族が何組もいたことである。服装は、明日にでも仕事ができるみなりであった。突然の解雇・倒産で路上に放り出されたのであろうか。IMF管理下の引き締め政策が弱い者にしわ寄せされる様を垣間見た思いであった。

翌朝、ウルサンの現代自動車に向かった。本社工場は、2.4万人雇用の世界最大の単一自動車工場であるが、直前まで解雇撤回を求めた家族ぐるみでストライキをやっていたとは思えないほど、整頓された静かな工場であった。案内の話だと、韓国労働運動は「成熟」してきて、闘争終了後直ぐに工場を立ち上げができるように、ストライキ中でも工場を破

壊す様な行動はとらなくなったという。家族をも巻き込んだ激しい街頭行動があっただけに、私にとっては意外であった。

工場では、アクセントという車の組立て工程を見たが、「アンドン」や「カイゼン」運動等を導入していたが、ラインの長さが印象的で、日本で脚光を浴び始めたモジュール生産の導入にはなお時間を要するように思えた。部品調達について案内の人に聞くと、周辺下請企業から70～80%調達されるというから、50%を切る稼働率の低下によるコスト削減圧力は相当なものであろうと予想された。

ソウルへの帰路、今回の調査でお世話になった米コンピュータ会社韓国支社の人から、韓国では薄板鋼板の問題からデザインが制約されること、また部品供給の下請企業の技術水準が低く、金型製作における技術水準の低さやME導入の低さもあって、性能や生産性上昇に種々のネックがあること、一方で

は必要な技術の輸入依存を脱却できないでいること、そしてその反面として相変わず勤勉な低賃金労働に依存せざるをえない構造的脆弱性をもっていること等を聞くことができた。

韓国訪問最後の夜、お世話になった人達へのお礼をかねて、伝統的韓国料理をともしにした。同僚の一人が大学院時代に指導したこともあり、旧交を温めつつ、厳しい韓国のビジネス事情を伺うことができた。今想うと、事情を知らない私達に、丁寧にしかも率直に話してくれた親切な人々、そして困難な状況に凜として立ち向かう態度に一種感動を覚えたものであった。そうした気質を持った人々が多くいる韓国はきっとこの困難を乗り越えるであろうと確信して韓国を後にしたのである。

しかし、1999年2月現在、未だなお、韓国の状況は改善されてはいないようである。

(明治大学教授)

税関賃金差別裁判横浜事案 東京高裁逆転勝利判決の歴史的意義

上山 興士

はじめに

2月24日東京高裁で出された税関賃金差別裁判横浜事案の逆転判決から2ヶ月余、全国の職場、地域で大きな反響が広がっている。職場の青年が「おめでとうございます。早く解決するといいですね」と組合員に声をかけたり、統括官(課長職)が、「がんばったかいがあったね」と激励してくれた、などの報告が次々と寄せられている。

日本の主要な新聞も、「団結権侵害認める。組合側が逆転勝訴」「国に250万円賠償命令」などと大きく報じた。

25年たたかわれてきた全税関の賃金差別裁判闘争の到達点、今回の横浜判決の意義と今後の展望についてまとめてみた。

判決の内容

2月24日(水)午前10時、東京高裁民事11部(荒井史夫裁判長)は、国に対し、全税関労組横浜支部と組合員が賃金差別の是正を求めていた国家賠償事件について、横浜地裁の判決を覆し、組合の主張を認める判決を言い渡した。

判決の要旨は

- 1、一審判決の一部を取り消す
 - 2、国は全税関横浜支部に250万円を支払え
 - 3、個人組合員(原告)の分は棄却する
 - 4、訴訟費用は国が7割、組合3割の負担とする
- と組合の主張をほぼ認めるものである。

その理由としては、国は、脱退勧誘など組合に対する違法な支配介入を行ったものであるから、国公法上の登録団体である組合(全税関)の団結権を違法に侵害したとして、国は、国家賠償法一条一項により、全税関横浜支部に対し、慰謝料を支払うべき義務がある。